



シギ・チドリ類調査 ニュースレター



2025年度秋期概要版

環境省自然環境局生物多様性センター / NPO法人バードリサーチ

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査 2025年度秋期調査結果の概要

全国108か所のサイトで実施

2025年度秋期調査は、2025年8月1日から2025年9月30日までの期間に実施されました。全国108サイト（暫定値）で調査を行い、このうち一斉調査（2025年9月21日を基準日とした前後1週間の調査）には96サイトが参加しました。一斉調査期間では、シギ・チドリ類43種11,116羽のほか、ヘラサギ2羽、クロツラヘラサギ105羽、ズグロカモメ1羽が記録されました。秋期の全サイトの最大個体数（調査期間内に記録された各種個体数の最大値）の合計は、シギ・チドリ類53種25,403羽のほか、ヘラサギ4羽、クロツラヘラサギ198羽、ズグロカモメ1羽でした。

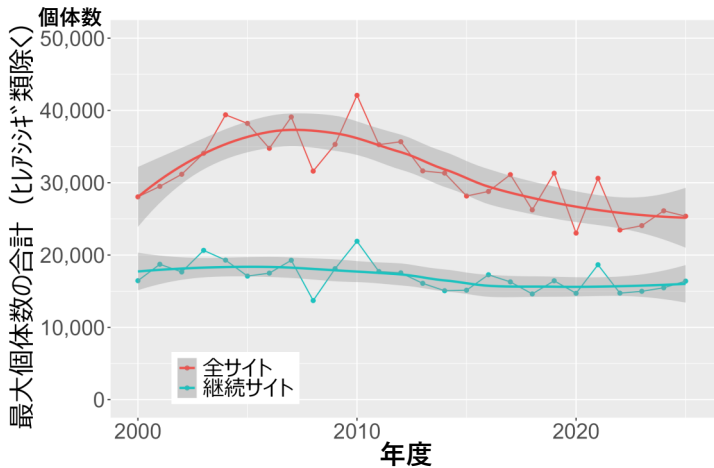


Fig.1. 秋期調査における全サイトと継続サイトの最大個体数合計の推移（2000年度から2025年度の全サイトN=108,継続サイトN=37）年次変動の大きい海上生活者のヒレアシシギ類は除外。

継続サイトは増加傾向

2000年度秋期以降の「全サイト」と「継続サイト（2000年から調査を継続しているサイト）」のそれぞれの最大個体数の合計を、ヒレアシシギ類（年次変動が大きく、海上生活者であるため）を除いてグラフに示しました（Fig.1）。全サイトには廃止済のサイト・新規サイトが含まれるため、継続サイトとは傾向が異なる場合があります。調査年の実績を示すために全サイトを、経年変化を把握するために継続サイトを解析しています。最大個体数の合計を前年度秋期と比べると、全サイトでは757羽減少し25,363羽、継続サイトでは、920羽増加して16,394羽となりました（前年比、全サイトで2.9%減、継続サイトで5.9%増）。継続サイトでは、3年連続で増加し、全サイトでは微減傾向、継続サイトでは微増傾向となっています。

トウネン・ソリハシシギは安定して上位

2025年度秋期調査におけるシギ・チドリ類の種構成比をみると、個体数上位は、トウネン（13.4%）、ソリハシシギ（13.1%）、ハマシギ（10.5%）でした（Fig.2）。上位種の順位は年による変動がみられるものの、トウネンとソリハシシギは長期的に安定して上位を占めており（Fig.3）、秋期は、これらの種の主要な渡り中継地として機能していることが示唆されます。また、種構成比（Fig.2）をみると、数%を占める種が複数あるほか、「その他」が20%以上を占めており、秋期の種多様性が高いことがわかります。

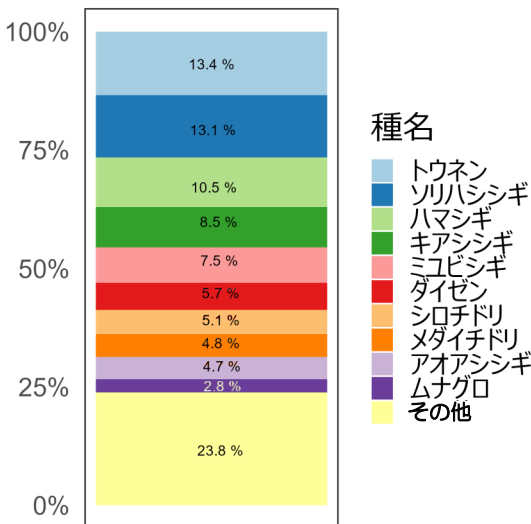


Fig.2. 2025年度秋期調査における種構成比

トウネンは前年度比で大幅減

トウネンが依然として最多種でしたが、個体数は約42%減と前年度から減少しました（Table 1 右表）。一方で、ソリハシギ（約18%増）、キアシシギ（約21%増）、ミユビシギ（約23%増）、シロチドリ（約47%増）などは増加しており、種ごとに異なる傾向が見られました（Table 1 左表）。これらの種の増加は、海岸線を利用する種が比較的良好な渡来状況であったことを示唆しています。しかし、秋期最大個体数は繁殖成功、渡来時期、気象条件等の影響を受けやすいため、経年的な評価も必要と考えられます。

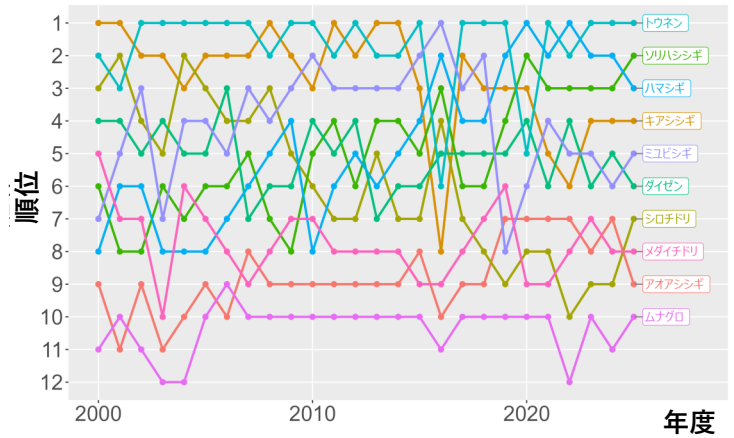


Fig.3. 2025年度秋期調査における最大個体数上位10種の順位の変化(2000年度から2025年度)

Table 1. 2025年度秋期 種別の最大個体数の前年度差 左:増加数上位5種、右:減少数上位5種

2025年度秋期最大個体数 増加数上位 (全サイト)			
種名	2024年度秋	2025年度秋	前年差
ソリハシギ	2,827	3,325	498
ホウロクシギ	205	660	455
シロチドリ	881	1,297	416
キアシシギ	1,786	2,163	377
ミユビシギ	1,538	1,894	356

2025年度秋期最大個体数 減少数上位 (全サイト)			
種名	2024年度秋	2025年度秋	前年差
トウネン	5,866	3,412	-2,454
ハマシギ	3,216	2,671	-545
タイゼン	1,688	1,460	-228
アオアシシギ	1,302	1,199	-103
コチドリ	759	665	-94

よく利用される九州西部の干潟群

サイトごとの最大個体数の地域差は大きく、全国値は少数の主要湿地に左右されています（Table.2）。大授搦（佐賀県）は5,284羽で、長期的にも増加傾向が認められることから、有明海奥部が基幹的な中継地であることが改めて示されました。白川河口（熊本県）も2,237羽と多く、前年度より1,007羽増加しており、球磨川河口や不知火干潟（いずれも熊本県）とあわせて、九州西部の干潟群の利用の高さが示唆されます。一方で、北日本の一部主要サイトでは減少が確認されました。これらの背景として、渡来の変化、渡来種の構成や繁殖

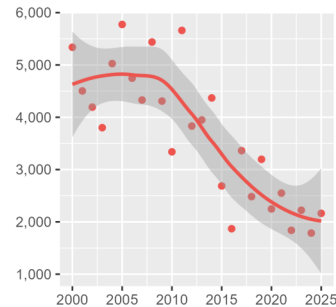


Fig.4. 秋期調査におけるキアシシギの最大個体数の変化(2000年度から2025年度)

成功などの要因が関与している可能性があり、とくに、減少傾向を示す種（例キアシシギ；Fig.4）については、その分布変化や主要利用地域の変動とあわせて、種別・地域別に詳細な分析を行う必要があります。

Table2. 2025年度秋期 サイト別の最大個体数 上位10サイト

年度	サイト	最大個体数 ¹	前年差	前年比
2025	大授搦	5,284	10	1.00
2025	白川河口	2,237	1,007	1.82
2025	球磨川河口	888	141	1.19
2025	不知火干潟	886	518	2.41
2025	野付崎・尾岱沼	695	-116	0.86
2025	三番瀬	667	51	1.08
2025	泡瀬干潟	627	-604	0.51
2025	高瀬川河口～むつ小川原港	621	-306	0.67
2025	氷川	619	-283	0.69
2025	栃木県南部水田地帯	608	263	1.76

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター タイトル写真:キアシシギ(三木敏史) 2025年度 秋期概要

発行元: 環境省自然環境局生物多様性センター
編集: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
編集者 守屋年史 電話/Fax:042-505-4044

<https://www.biodic.go.jp/moni1000/>
<http://www.bird-research.jp/>
メール: shigichi@bird-research.jp